大槻國彦の出会いと献身のドラマ　1953

～ 仙台教会の歴史シリーズ　その 7 ～

小林孝男

１．大槻國彦青年とグラント宣教師の出会い

大槻國彦牧師は、仙台教会が生み出した最初の献身者です。高校を出てすぐに神学校に進学し、神学校卒業後、粕谷伝道所の専任牧師として招聘され、2 年間の牧会経験を積んだ後に按手を受けることになります。その按手礼拝の説教の中で、彼はご自分とキリスト教との出会いについて述べていますが[1]、その内容を要約すると以下の通りです。

大槻國彦さんは 1936 年（昭和 11）に仙台市に生まれました。戦時中、父親と兄は民間兵として満州に渡っており、仙台の自宅で彼と母親の二人暮らしをしていました。ところがその母親は、1945 年（昭和 20）7 月 10 日の仙台空襲で亡くなってしまい、当時 9 才の國彦少年は、父の郷里に住む祖父や叔父・叔母のお世話になることになります。その田舎にも爆撃機が飛んできて空襲を受けたそうです。家の近くに陸軍の練兵所があったからです。説教の中では父の郷里がどこなのかは具体的には語られていませんが、その練兵所というのは、県中央部にあった王城寺原諸兵演習場のことでしょう。ということは色麻町、大和町、大衡村あたりが、父親の郷里の候補地ということになりますが、更にグラント宣教師の思い出を綴った大槻師の他の文章を読み合わせると、父の郷里は鶴巣村であったことが分かります[2]。

戦後の混乱の中、心は不安や孤独感に溢れ、自分自身の存在意味を自問しても、空しさだけがやまびこのように帰ってくるような日々を送っていた國彦です。ある日、彼は北仙台の大きな教会の頑丈な鉄の門の前に立っていました[3]。門の内側の空間には、自分が生きている世界とは全く違う世界が広がっているかのようでした。その教会の隣に外国人の家らしい建物がありましたが、当然大きな教会と繋がりのある家なのだろうと國彦は思いました。その洋風の建物の小さな門の近くには掲示板があり、十字架に掛けられたキリストの絵が飾られ、開かれた聖書も置いてあります。そして小さな看板には、「キリスト教について知りたい場合はどうぞ遠慮なくお入りください」と書かれています。その言葉に誘われるように、10 代も後半になった國彦青年は小さな建物の扉を叩いていました。それがグラント宣教師との出会いであり、キリスト教との出会いとなります。1953 年 7 月のことでした[4]。後にな

って、大きな教会はカトリック教会、隣の小さな建物はその教会とは関係のない、バプテストの宣教師館だったことを彼は知るのでした。

２．宣教師館の屋根裏部屋へ居候

國彦青年はグラント宣教師からもらった福音書の分冊とパンフレットを読む中で、次第にキリスト教に興味を持つようになります。祖父の家では、夕食後の囲炉裏ばたでの団欒の時にも、聖書やキリスト教に関する本ばかり読んでいるもので、徐々に家族から煙たがれ、皮肉を言われるようになります。叔父からは、「宣教師の神を信じたいなら、宣教師に飯を食わせてもらえ」とまで言われる始末です。そこで 1954 年（昭和 29）の旧正月の頃に、17 才の國彦青年は仙台に引っ越すことを決意します。しかし、住む場所や仕事の当てがあったわけではありません。相談を受けたグラント宣教師は、夫妻の日本語学習を助ける「仕事」を彼にしてもらう代わりに、宣教師館の小さな屋根裏部屋と食事を提供したのでした[5]。そしてその間、礼拝や普段の生活において、グラント宣教師から熱心な指導を受け、やがて信仰の決心に導かれ、同年の 4 月 18 日に広瀬川でバプテスマを受けることになります。その時彼は、これが自分の新しい人生の本当の始まりなのだ、と強く感じたのでした。自分自身の無知・無力を自覚していましたので、牧師になろうなどとは思いませんでしたが、やがて宣教のために自らの人生を捧げたい、との決意へと導かれることになります。

３．神学校を目指した 20 才の高校生

その決意をかなえるため、彼は神学校を目指すことになりますが、そのためには高校を出ていなければなりません。そこで一浪して 1956 年（昭和 31）に仙台高校に入学します。貧しかったため学生帽もキャンバスシューズも準備できず、また既に 20 才であり年齢的に目立った存在でしたので、入学して直ぐに教頭に呼び出され、飲酒・喫煙・服装・生活態度等について指導を受けました。その時彼は、自分は何としても神学校に入りたいこと、そのために高校に入学したことを告白します。「神学校に入学するつもりのクリスチャン」というレッテルを貼られての 3 年間の高校生活を終え、やがて 1959 年（昭和 34 年）4 月に「バプテスト神学校」[6]に入学し、献身者としての歩みが具体的にスタートするのでした。

大槻師のキリスト教との出会いと献身の物語は、なにかドラマのようです。神の不思議な御手の業をそこに見る思いがします。しかし、よく考えてみれば信仰に導かれた私たち自身も、不思議な神のドラマの中で、舞台の主人公として一人ひとりが選び出され、用いられているということに他ならないのです。

---

[1]『ワース・C・グラント師の日本観』167～178 頁。按手礼拝は 1966 年（昭和 41）頃
[2] 資料（2011/05/01_記念誌・ねむの木に寄せて_抜粋） 32−33 頁
[3] その事情は、資料（2011/05/01_記念誌・ねむの木に寄せて_抜粋） 32 頁に書かれている。
[4] 相馬の野馬追は 7 月に開催される。
[5] グラント宣教師の著書の合本版の巻末の付録参照（298 頁）。そこには 2003 年 7 月 6 日に師が仙台教会で行った説教の原稿が収録されている。
[6] 西南学院大学文学部神学科（当時）のことであろう。